

なぜ、その英語では通じないのか？

マーク・ピーターセン・著

集英社インターナショナル ウェブ立ち読み

Chapter 1

日本語と英語の
ギャップを考える

- 8 revengeの用法
リベンジ(復讐)好きの
日本人
- 13 「頑張る」をどう表すか？
英語で単純に
「頑張れない」わけ
- 18 「カタカナ英語」を考える
バージン・ロードは
英語なのか？
- 22 「趣味」を英語でどう表すか？
読書はhobbyでは
ありません
- 26 「苦手」は英語でどう表す？
「私は英語が苦手です」
の訳し方
- 34 「知る」= knowなのか？
意外と知らない
knowの用法
- 39 「ほとんど」を表すには
almost = 「ほとんど」
にあらず
- 44 think, feel, realizeの用法
単純に訳せない「思う」
- 52 「甘い」と“sweet”
甘さを表す多様な英語表現
- 57 should, must, had betterの用法
最適な「～べき」の
表現はどれか？

Contents もくじ

Chapter 2

知ってるつもりの 基本文法・語法

- 64 「ある」をどう表すか？
「There + be 動詞」か
have か？
- 68 「～など」をどう表すか①
“such (～) as ～”を
使いこなす
- 72 「～など」をどう表すか②
使いこなしたい
“including ～”
- 76 neverの意味
「絶対」ではないnever
- 81 also, too, as well, besides の使い方
「～も」「また～」を
効果的に表すには？
- 86 quiteの使い方①
「まったく」か「けっこう」か？
- 90 quiteの使い方②
名画のセリフで学ぶquite
- 94 quite の使い方③
quiteは、大した副詞
- 98 「to + 動詞の原型」と「動名詞」
“to ～”と“～ing”の違いは？
- 103 some, any ～の用法
微妙な意識から
生まれる違い
- 108 willの意味①
will＝「でしょう」は間違い
- 112 willの意味②
willが起こす勘違い
- 116 様々な比較の形
“compared to [with] ～”
の出番はいつか？

Chapter 3

一歩進んだ 英語表現を目指して

- 122 noとnotを使わない否定文
見かけは肯定文の否定文
- 128 副詞と前置詞の組み合わせ
謎の「動詞＋副詞＋
副詞＋前置詞」
- 132 becauseとsince
because [since]を
どこに置くか？
- 137 「受動態」
受身の効果的な使い方
- 142 however, but, yetなどの用法
「しかし」を表す英語
- 148 関係代名詞とコンマ①
コンマで決まる
関係詞節の意味
- 153 関係代名詞とコンマ②
コンマを使いこなす方法
- 158 分詞構文①
洗練と簡潔さを求めて
- 163 分詞構文②
過去分詞を使った分詞構文
- 168 分詞構文③
忘れてはならない
分詞構文のルール
- 173 倒置
倒置を使いこなす
- 180 一般論とwe
weの使用が多すぎる
- 186 手紙の書き方
礼状の書き方を考える

大昔に受けていた「日本語」の授業での出来事である。和食について論じていたところ、日本人の先生が「みなさん日本に来て、うなぎとか明太子とか納豆とか、自分にとって新しい食べ物をいろいろ試してみる勇気があっていいですね。特に切尔西さんはそうみたいです」と私たち受講生をほめてくれた。それに対して、切尔西というアメリカ人の女性が、涼しい顔で「私は**悪い例**です」と応えた。一瞬の沈黙のあと、先生は不思議そうに切尔西を見た。

一方、英語圏出身者のみで構成されていた私たち受講生は、特に何も感じなかった。なぜ先生が怪訝そうな表情をするのか理解できなかったのだ。というのは、そのアメリカ人女性が放った「日本語」が“I’m a bad example.”（私はその**例**としてはふさわしくない）の正しい訳だと思っていたのだ（また、切尔西の継母がたまたま日系人で、小さい頃から日本料理で育ってきたことも先生以外は皆知っていた）。

私たちはそのときはまだ、英語の感覚にもとづいて日本語を組み立てていたので、この「私はその**悪い例**です」に対してこれといった違和感を覚えず、先生のほめ言葉に対するふさわしい表現だと思っていたのだ。もちろん先生は、彼女の事情を知らなかったのだが、仮に知っていたとしても、この「私は**悪い例**です」という日本語は、やはりちょっと不自然で奇妙な表現として受け取られてしまっただろう。

本書では、逆のケース、つまり一般の日本人の書く英文によ

く見られるもので、日本語の観点からは特に違和感を覚えないが、意図が伝わらない英語表現を数多く取り上げて、その解決法を示している。例として選んだものの多くは、私が大学で受け持っている「英作文」の授業でよく目にするものだが、日本人の書いた英語論文や英文メールを添削するときに出合った興味深い例も、その中には含まれている。

なお、本書は、基本的に「伝えたい意味が通じる英文」を書くために努力している人の役に立つことを願い執筆したものだが、日常的な会話に使えるヒントも多く盛り込んだつもりだ。通じる英語を書くことと会話の上達が不可分の関係であることは、英語のみならず、語学を真剣に勉強している方には、分かってもらえるだろう。

また、なるべくこれまでの私の著書で取り上げたことのない英語の用法を中心に解説したつもりだが、**will** の用法など誤解の根が極めて深く、もう一度確認したほうがいいと思われるポイントは、今回も取り上げざるをえなかった。

いずれにしても、ここで取り上げた課題を一つ一つ克服していけば、英語の「底力」は確実に向上するはずだ。少なくとも日本語と英語では発想が異なっていることを意識するだけでも、英語の伝達力は高まると思っている。

最後に、本書を書くにあたっては、集英社インターナショナルの佐藤信夫さんにご尽力いただいた。また、いつも様々な示唆を与えてくださる全国の読者のみなさんにも、心からの感謝を伝えたい。ありがとうございます。

2016年3月 マーク・ピーターセン

本書は書き下ろしです。

本文中の▶▶▶A、▶▶▶B ... の付いた文章は、
各節の最後に
「覚えたい重要例文」としてまとめてあります。

装丁・本文デザイン 高橋 忍
カバー写真 内藤サトル

Chapter

1

日本語と英語の ギャップを考える

「国際化」が進んだ現在、
日本語の中には、一見英語に思える表現があふれています。
しかし、「日本語の感覚」で取り入れてしまった
擬似英語を使って書いたり話したりすると、
重大なコミュニケーションの障害を引き起こしかねません。
2つの言語の隙間を検証してみましょう。

リベンジ(復讐)好きの日本人

Revenge is a dish best served cold.

(復讐は冷めてから出したほうが美味しい料理だ)

妻が天井屋で「復讐」する!?

たまたま Facebook で見かけた日本語表現の話である。友だちが、奥さんと久しぶりに「思い出の天井屋」を訪ねたことについて「前は、体調がすぐれなかったためにいまひとつ楽しめなかったという妻のリベンジも兼ねて店へ行ってみました」と書いた文を見つけた。こうした「リベンジ」はごくふつうの現代日本語になっていることがよく分かるが、それを読んだ私は、あのかわいい奥さんが天井屋にモロトフカクテル（火炎瓶）を投げつける瞬間を浮かべてしまった。やはり、私にはどうしても慣れない「カタカナ英語」があるようだ。

逆のケースを考えれば、日本人も同じ気持ちになる場合が多いと思う。たとえば、英語に日本語からの外来語として **hōfuku** (報復) という言葉があり、アメリカ人が

We went to the shop partly for my wife's **hōfuku**.

と書いた文があるとする（あえて訳せば「我々は妻の報復を兼ねて店に行ってみました」）。それを見かけたら、たいていの日本人はびっくりするだろう。たとえ、アメリカ人が使う **hōfuku** と日本人が使う「報復」とは意味が違うということが十分に分かっていても、抵抗感を覚える日本人が多いのではないだろうか。言葉は理屈ではないのである。

しかし、**revenge** という英語は、名詞としても動詞としても、面白い使い方がたくさんある。たとえば、名詞としては “**get revenge on ~**” のように、**get** という動詞と組み合わせることが多く、

She got revenge on her husband by secretly putting curry powder in his wine.

（彼女は、夫が飲むワインに、密かにカレー粉を入れて、恨みを晴らした）

▶▶▶A

のような文がその典型的な使い方である。似たような言い方では、

She took revenge on her boyfriend by secretly releasing ear mites on his dog's fur.

（彼女は、恋人の愛犬の毛に、密かに耳ダニを放して、復讐した）

▶▶▶B

のように、**take** という動詞と組み合わせることもあるが、二

ニュアンスがちょっと違う。“She **got revenge on** her husband”では、「それで気が済んだ」という感じになるが、一方、“She **took revenge on** her boyfriend”のほうだと、彼女はさらなる「復讐」を企^{たくら}んでいるかもしれないという穏やかではないニュアンスが含まれる。

一方、**revenge** を動詞として使う場合、たとえば、

I decided to **revenge myself** on the magazine for not printing my essay.

(エッセイを掲載してくれなかったことに対して、私はその雑誌に**復讐**してやることにした)

▶▶▶C

のように、**再帰代名詞**と組み合わせることが多い。

また、日本でもよく知られているかもしれないが、

Revenge is a dish best served cold.

という有名な格言がある。これは通常（天井とは違って）「**復讐**は冷めてから出したほうが美味しい料理だ」という意味だが、「**復讐**してやる！」といちばん燃えているときよりも、「**復讐**は少し冷静になってからやったほうがうまくいく」という受け止め方もある。

なお、友だちの書いた話に戻るが、「前は、体調がすぐれなかったためにいまひとつ楽しめなかったという妻の**リベンジ**も兼ねて店へ行ってみました」ということを英語にするなら、

We went to the shop **partly to make up for** the previous time, when my wife had been a bit under the weather and hadn't really been able to enjoy it.

▶▶▶D

と書けばいい。この“**make up for** ~”は「~を補う」や、「~を補正する」「~の埋め合わせをする」という意味でよく使われる表現である。

幸いなことに、今回久しぶりにその天井屋を訪ねた友だち夫妻は、「体調管理ばっちりの妻もおいしいと言って残さずいただきました」と、結局、うまい「リベンジ」ができたようだ。

覚えたい重要例文

A. get + revenge + on

She **got revenge on** her husband by secretly putting curry powder in his wine.

(彼女は、夫が飲むワインに、密かにカレー粉を入れて、恨みを晴らした)

B. take + revenge + on

She **took revenge on** her boyfriend by secretly releasing ear mites on his dog's fur.

(彼女は、恋人の愛犬の毛に、密かに耳ダニを放して、復讐した)

C. revenge + 再帰代名詞

I decided to **revenge myself** on the magazine for not printing my essay.

(エッセイを掲載してくれなかったことに対して、私はその雑誌に復讐してやることにした)

D. make up for ~ = 「~の埋め合わせをする」を使う

We went to the shop **partly to make up for** the previous time, when my wife had been a bit under the weather and hadn't really been able to enjoy it.

(前回は、体調がすぐれなかったためにいまひとつ楽しめなかったという妻のリベンジも兼ねて店へ行ってみました)

英語で単純に 「頑張れない」わけ

No matter how **hard I tried**, I still couldn't get the cork out of the bottle.

(私は、いくら頑張っても瓶からコルクを抜くことができなかった)

“Do your best!”が不快になる瞬間

大昔、まだ日本語を勉強したことの無い時分に、私はたまたまアメリカの大学で日本人の男子留学生と知り合いになった。ある朝、キャンパスでばったり会って話していたところ、私が“*Well, I've got a test now—see you later.*”（じゃ、これから試験なので、またな）と別れのあいさつをしたら、彼は“*Do your best!*”と返した。それを聞いた私はびっくりし、少し不愉快な気持ちにさせられた。今なら、彼はただ単に日本語の感覚で「頑張ってね」と言ったつもりだということがよく分かるが、あのときは、「命令形の“*Do your best!*”と言われなくても、試験だったらベストを尽くすに決まっているだろう」と彼の「注意の言葉」に強い抵抗感を覚えたのだ。

また、“*Do your best!*”という言い方には、上記のような

場面に不適切と思われるもう1つの理由がある。それは「その試験はどうせ無理だろうが、ベストを尽くせば悔いはないから」といったようなニュアンスがあるからだ。たとえば、自分の最も苦手とする「グループ面接」が翌日にあるので悩んでいる就活中の大学生がいるとする。そこで、その悩みを聞いた母親は、

Well, just **do your best**.

(まあ、ベストを尽くせばそれでいいのよ)

のように慰める。こうした場合こそ“**do your best**”という言い方の出番である。

あ那时的の留学生は、きっとそのうち英語圏の「言語的習慣」に気づき、同じようなときに“Good luck!”と言うようになっただろうが、実際に「頑張る」という意味を英語で表したい場合、どういう表現がいいのだろうか？

まず、私が見てきた、日本人の大学生が書いた英作文で極めて多いのは、こんな言い方だ。

I am going to go to Australia next year, so I think
I want to **study** English **hard** from now on.

英語としてはちょっと文意を測りかねるので、こうした文を書いた本人に訊いてみると、たいていの場合、伝えたかったのは「来年オーストラリアに行く予定なので、これからも英語の勉強を頑張りたいと思います」ということになる。

そこで、from now on は「これからも」という意味ではなく、「(これまでとは違って) これから**は**」という意味なので、from now on を省き、**study English hard** の部分を **keep studying English hard** (英語の勉強を頑張り続ける) と訂正する。

また、“I think I want to ~” という言い方は、「~したいような気がする」といった、あやふやな感じの表現なので避けたい。また、もしそこで I think の部分を省き、

“**I want to** keep studying English hard.”

(英語の勉強を頑張り続けたいです)

と直したとしても、want to という表現を使っているのは、明らかな「やる」という意志ではなく、「やりたいなあ」というちょっとはっきりしない感じになってしまう。こういう表現を読んだり聞いたりした者の多くは、「じゃ、自由にすれば？」と言いたくなるだけだろう。結局、もともとの英文を

I am going to go to Australia next year, so I'll keep studying English hard.

(来年オーストラリアに行く予定なので、英語の勉強を頑張り続けます)

のように書き直せばいい。

日本語では「私は~する」という断定的な言い方を避けるた

めに、それを「私は～したい」、あるいは「私は～したいと思う」と述べるのがふつうだろうが、英語の感覚ではそうした言い方は優柔不断に感じられるので、避けたほうがいい。

では、「頑張る」の用法をおおざっぱに3つに分けて、英語で表現する場合に可能な書き方の候補をそれぞれ考えてみよう。

覚えたい重要例文

A. 頑張る＝「努力する」を表す、3通りの書き方

① No matter how **hard I tried**, I still couldn't get the cork out of the bottle.

② Despite my **best efforts**, I still couldn't get the cork out of the bottle.

③ However I **worked at it**, I still couldn't get the cork out of the bottle.

(私は、いくら**頑張**っても瓶からコルクを抜くことができなかった)

B. 頑張る＝「我を通す」を表す、3通りの書き方

① Even though the excuse she made up was an obvious lie, she **stuck to** it.

② Even though the excuse she made up was an obvious lie, she **wouldn't yield**.

③ Even though the excuse she made up was an obvious lie, she **persisted with** it.

(彼女がこしらえた言い訳は明らかな嘘だったが、それでも頑張ってそれを押し通そうとしていた)

C. 頑張る＝「ある場所を占領して動かないでいる」を表す、3通りの書き方

① The guards at the university's main gate **refused to budge**, and ultimately the demonstrators were unable to get in.

② The guards at the university's main gate **kept their place**, and ultimately the demonstrators were unable to get in.

③ The guards at the university's main gate **maintained their position**, and ultimately the demonstrators were unable to get in.

(大学の正門で警備員が頑張っていたので、デモ隊は結局入れなかった)

Chapter

2

知ってるつもりの 基本文法・語法

「There + be 動詞」の構文、
never や quite などの用法は、どれも
英語を学び始めた初期の段階に出合う基本中の基本ですが、
的確に使いこなすことは意外に難しいようです。
日常的に現れるこれらの事項を正確に理解できれば、
英語力は格段にアップするはずです。

「There＋be動詞」かhaveか？

I want to study abroad. I **have** three goals.
First, I want to talk with
many people from other countries.

(私は留学したいです。目標が3つあります。
第一に、多くの外国人と話したいです)

「ある」＝「There＋be動詞」にできないわけ

次の英文を考えてみよう。

There are two subfamilies of chameleons.

(カメレオンには亜科が2つある)

▶▶▶A

このように、何かの「存在」を示す「**There＋be動詞**」という形の英語を日本語にする場合、「～がある」と訳すことがふつうである。が、逆の場合、つまり、「～がある」という日本語を英語にする場合、「**There＋be動詞**」という形が不適切な表現になってしまうケースが多い。たとえば、日本人の大学生が書いた英作文には、こんなセンテンスが頻繁に出てくる。

I want to study abroad. **There are** three goals.

First, I want to talk with many foreigners.

学生からすれば、これは「私は留学したいです。目標が3つあります。第一に、多くの外国人と話したいです」という日本語の完璧な英訳のつもりだろうが、英語としてはおかしい言い方になっている。まず、**foreigners** という語の使用をやめなければならない。というのは、留学先に着いた瞬間、自分こそが **foreigner** となるわけだから、この語を使うのはふさわしくないのだ。ここでの **foreigners** を **people from other countries** のように訂正するべきである。

また、“**There are** three goals.” の “**There are....**” の使い方にも問題がある。たとえば、もし一般論として「マルタで英語を勉強する利点は3つある」という話なら、

There are three advantages to studying English in Malta.

の “**There are....**” がちょうどいいのだが、それは一般論として言っているからだ。これに対して、前出の “I want to study abroad. **There are** three goals.” の場合は、筆者が述べる **goals**（目標）は一般的に誰もが持っている目標ではなく、あくまでも個人の **goals** にすぎないので、“**There are....**” は不適切な言い方となる。自分自身の話に限るこうした場合には、たとえば、

I want to study abroad. **I have** three goals.

▶▶▶B

のように述べればいいのだ。

同じように、たとえば「気候変動を予測することは非常に難しい。これには2つの理由がある」というように一般的に述べている場合なら、英語では「**There + be 動詞**」を使って

Climate change is very difficult to predict. **There are** two reasons for this.

▶▶▶C

のように述べればいい。これに対して、たとえば「佐江子と彼女の母親は、インド料理を食べないほうがいいと思っている。その理由は2つある」というように特定の個人のみに関する話なら、英語では「**There + be 動詞**」を使わず、

Saeko and her mother say that Indian food should be avoided. **They have** two reasons for thinking that.

▶▶▶D

のようにすればいい。

A. 何かの存在を示す「ある」

There are two subfamilies of chameleons.

(カメレオンには亜科が2つある)

B. 個人的な目標を示す「ある」

I want to study abroad. **I have** three goals. First, I want to talk with many people from other countries.

(私は留学したいです。目標が3つあります。第一に、多くの外国人と話したいです)

C. 一般論を示す「ある」

Climate change is very difficult to predict. **There are** two reasons for this.

(気候変動を予測することは非常に難しい。これには2つの理由がある)

D. 個人的な理由を示す「ある」

Saeko and her mother say that Indian food should be avoided. **They have** two reasons for thinking that.

(佐江子と彼女の母親は、インド料理を食べないほうがいいと思っている。その理由は2つある)

“such (～) as ～” を使いこなす

During the summer vacation,
my younger sister read **such** important 19th
century Russian novels **as** *Fathers and Sons*,
Crime and Punishment, and *War and Peace*.

(夏休みの間に、妹は『父と子』『罪と罰』『戦争と平和』など、
19世紀ロシアの偉大な長編小説を何冊か読んだ)

such as ～より such ～ as ～にしたい

日本人の書いた英文を添削するときに、“... , **such as** ～”
という形を使ったセンテンスによく出合うが、私はそれを“...
such ～ **as** ～”に書き換えることが多い。たとえば「私は軟
式テニスやバドミントン、スカッシュなどのラケットスポーツ
が好きです。しかし、卓球は好きではありません」という意味
を表すために書かれた

I like racquet sports. For example, I like racquet
sports, **such as** soft tennis, badminton, squash,
and so on. But I don't like table tennis.

がその典型である。まず、3つの短い文に切って書かれているところが稚拙な印象を与えてしまうので、これを

I like racquet sports, **such as** soft tennis, badminton, and squash, but I don't like table tennis.

のように1つの文にまとめる。この英文は、文法的には正しいが、文体としては

I like **such** racquet sports **as** soft tennis, badminton, and squash, but I don't like table tennis. ▶▶▶A

のように書き換えたい。そうしたほうが滑らかに流れる、すっきりした英文になる。

なお、冒頭の英文に見られるように、日本語の「など」を表したい場合に、条件反射的に“..., and so on”を付け加える英語学習者が多いようだが、こうした英文には“..., and so on”はまったく無用である。というのも、「類似の物事の中から例として抜き出し、他にもある」ということを示す「など」の役割は、“..., **such as** ~”と“... **such** ~ **as** ~”がちゃんと果たしてくれるからである。

もう1つ、“..., **such as** ~” → “... **such** ~ **as** ~”の例として、日本人の大学生が書いた

I live with my family, and I don't have to worry

about living expenses **such as** clothes, food, school expenses, and so on.

(私は家族と一緒に住んでおり、洋服や食べ物、学費などの生活費を気にしなくていい)

という文が挙げられる。やはり、これも

I live with my family, and I don't have to worry about **such** living expenses **as** clothes, food, or school fees.

▶▶▶B

のように書き換えたほうが、まさに「滑らかに流れるすっきりした英文」になる。

こうした“... **such** ~ **as** ~” は、たとえば、

During the summer vacation, my younger sister read **such** important 19th century Russian novels **as** *Fathers and Sons*, *Crime and Punishment*, and *War and Peace*.

(夏休みの間に、妹は『父と子』『罪と罰』『戦争と平和』など、19世紀ロシアの偉大な長編小説を何冊か読んだ)

▶▶▶C

に見られるような形を使うと、若干「洗練度」が増すので、お勧めである。

A. such ~ as ~を使いすっきりと

I like **such** racquet sports **as** soft tennis, badminton, and squash, but I don't like table tennis.

(私は軟式テニスやバドミントン、スカッシュなどのラケットスポーツが好きですが、卓球は好きではありません)

B. such ~ as ~を使い滑らかに

I live with my family, and I don't have to worry about **such** living expenses **as** clothes, food, or school fees.

(私は家族と一緒に住んでおり、洋服や食べ物、学費などの生活費を気にしなくていい)

C. such ~ as ~を使い洗練度を増す

During the summer vacation, my younger sister read **such** important 19th century Russian novels **as** *Fathers and Sons*, *Crime and Punishment*, and *War and Peace*.

(夏休みの間に、妹は『父と子』『罪と罰』『戦争と平和』など、19世紀ロシアの偉大な長編小説を何冊か読んだ)

Chapter

3

一歩進んだ 英語表現を目指して

日本人が書いた英文の中に、「分詞構文」や「強調のための倒置」が出てくることはめったにありません。

しかし、このような修辭的技法を使えば、
英文の洗練度を上げることが可能になります。

そしてその用法は、曖昧で感覚的なものではなく、
とても明確で論理的なルールに基づいているのです。

見かけは肯定文の否定文

She **is hardly** the kind of person capable of robbing a bank.

(彼女は、とても銀行強盗ができるような人間ではない)

noを使わないで「品のある文」を書く方法

英語で否定文を書くとき、たとえば、

She has **no** interest at all in soccer.

(彼女は、サッカーにはまったく興味がない)

I was **not** satisfied with his reply.

(私は、彼の回答に満足できなかった)

のように、**no** と **not** を使うことがよくあるが、“**un-**” や “**dis-**” などのように否定の意を表す接頭辞を使って、

She is completely **un**interested in soccer.

▶▶▶A

I was **dissatisfied** with his reply.

▶▶▶B

と書いても同じ意味を表すことができる。**no** と **not** ばかりの否定よりも、このように少し表現のバラエティを利用したほうが魅力的な文章になる。

なお、**no** と **not** を使わずに否定を表す、もっと面白い方法もある。たとえば「まだ～していない」という意味を表したい場合、「**has [have] yet to** + 動詞の原形」という形を使えばいいケースが多い。「私は、彼女の不倫の証拠になるものをまだ全然見つけていない」という話なら、**not** を使って

I have **not yet found** any proof at all of her infidelity.

と書いても差し支えないが、

I have **yet to find** any proof at all of her infidelity. ▶▶▶C

のように書けば、もう少し「品のある文」になるのだ。

また、副詞の **hardly** と **scarcely** も便利な言葉である。たとえば、「彼女は、とても銀行強盗ができるような人間ではない」という話なら、**hardly** を使って、

She **is hardly** the kind of person capable of robbing a bank.

▶▶▶D

のように書けばいい。あるいは「まさか彼が自分の臆病を認めるなんて思っていないでしょうね」という話なら、副詞の **scarcely** を使って、

You can **scarcely expect** him to admit his cowardice.

▶▶▶E

と書けばいい。

もちろん、**hardly** と **scarcely** は、上記のような「完全否定」ばかりでなく、「程度が極めて限られている」ことを示す「準否定語」でもある。たとえば、

①I **hardly have any** alcoholic beverages in the house.

(私は、家に酒類をほとんど置いていない)

②She **could scarcely speak** of the tragedy.

(彼女は、その悲劇についてほとんど話せなかった)

のような例が挙げられる。厳密に言えば、この2文には、

①「私の家に酒類が置いてあるなんて、とうていありえない」

②「彼女は、その悲劇についてとてもじゃないが話せなかった」

という「完全否定」の受け止め方もあるが、通常、文脈でどちらの意味が正確かが分かる。また、「ほとんどない」という意

味をはっきり伝えたい場合であれば、たとえば、①の **hardly** を

I **have hardly any** alcoholic beverages in the house.

のように **any** の直前に配置すればいい。元々の “**hardly have any**” の場合は、**hardly** が動詞の **have** を修飾しているのか、それとも、形容詞の **any** を修飾しているのか曖昧だが、もし動詞の **have** を修飾しているのであれば、「完全否定」の可能性はある。それに対して、**any** の直前に配置した “**have hardly any**” の場合は、**any** を修飾しているに決まっているので、「完全否定」ではなく、「ほとんどない」という受け止め方しかないのである。

一方、② **scarcely** の場合、**scarcely** の代わりに、そもそも「完全否定」の役割をもたない **barely** を使って、

She could **barely** speak of the tragedy.

と書けば、「ほとんど話せなかった」という受け止め方しかできない文になるのである。

なお、もし逆に「完全否定」のつもりで書いていることをはっきりさせたい場合であれば、事実と反することを示す**假定法**を使って

① I would hardly have any alcoholic beverages in the house.

(私の家に酒類が置いてあるなんて、とうていありえない)

▶▶▶F

② She could scarcely have spoken of the tragedy.

(彼女は、その悲劇についてとてもじゃないが話せなかった)

▶▶▶G

と書けばいいのだ。

覚えたい重要例文

A. 否定の意を表す接頭語“un”を使う

She is completely **un**interested in soccer.

(彼女は、サッカーにはまったく興味がない)

B. 否定の意を表す接頭語“dis”を使う

I was **diss**atisfied with his reply.

(私は、彼の回答に満足できなかった)

C. 「have yet to + 動詞の原形」を使う

I have **yet to find** any proof at all of her infidelity.

(私は、彼女の不倫の証拠になるものをまだ全然見つけていない)

D. 副詞“scarcely”を使う

She is **hardly** the kind of person capable of robbing a bank.

(彼女は、とても銀行強盗ができるような人間ではない)

E. 副詞“scarcely”を使う

You can **scarcely expect** him to admit his cowardice.

(まさか彼が自分の臆病を認めるなんて思っていないでしょうね)

F. 仮定法を使った「完全否定」

I **would hardly have any** alcoholic beverages in the house.

(私の家に酒類が置いてあるなんて、とうていありえない)

G. 仮定法を使った「完全否定」

She **could scarcely have spoken** of the tragedy.

(彼女は、その悲劇についてとてもじゃないが話せなかった)

謎の「動詞＋副詞＋ 副詞＋前置詞」

Gold coins were **brought up from below** the hull of the sunken ship.

(金貨が沈没船の船体の下から海面まで引き上げられた)

up from below, out from behindが多出する英語

史上最高のスパイ小説とまで賞賛されるジョン・ル・カレ著の *The Spy Who Came in from the Cold* の邦題は分かりやすく、また邦題らしい『寒い国から帰ってきたスパイ』となっているが、原題には「国」や「帰ること」を意味する言葉はない。*The Spy Who Came in from the Cold* という英語は、いわば「寒い外から暖かい部屋に入ってきたスパイ」という意味なのである。冷戦を舞台とするこの小説では、“the cold”（外の寒さ）は二重スパイが属する「大変危険な世界」を表し、“come in from the cold”は二重スパイの仕事をやめて、どちら側かの「安全な世界に入り込む」ことを表す。

英語には“**come in from the cold**”というように、「動詞＋副詞＋前置詞」の形の表現が実に多い。また、その副詞は、

ここでの **in** のように、前置詞としてお馴染みである語が少なくない。別の例を挙げると「その難民は国境を越えてクロアチアに入った」ということなら、それを

The refugees **crossed over into** Croatia. ▶▶▶A

と表現することがふつうであり、ここで副詞として用いられている **over** は、歌の題名 “**Over** the Rainbow” (「虹の彼方に」) のように、前置詞として用いられることも極めて多い。

なお、**from** が副詞として用いられる場合、「動詞 + 副詞 + 副詞 + 前置詞」という形も決して珍しくなく、映画『雨に唄えば』には、その典型的な例が出てくる。ミスター・シンプソンという男が映画のスクリーンの後ろにいると思い込んでいる登場人物が「そのスクリーンの後ろから出てください」の意味で、

Come out from behind that screen, Mr. Simpson!

と言うセリフがそれだ。ここでは、**out** と **from** のいずれも副詞であるが、**behind** は、“screen” という目的語をもっているなので、前置詞だ。逆に、たとえば、

I've **fallen behind in** my house payments. ▶▶▶B

(私は住宅ローンの返済が遅れてしまっている)

のような文の場合、**behind** は目的語をもたず、副詞として使われており、そして、**in** は payments を目的語としてもっている、前置詞として使われていることが分かる。

もう1つの「動詞＋副詞＋副詞＋前置詞」の例として、

Gold coins were **brought up from below** the hull of the sunken ship.

(金貨が沈没船の船体の下から海面まで引き上げられた)

▶▶▶C

というような文が挙げられる。あるいは、

At about 03:30, the UFO **moved away from above** my tent and disappeared in an instant.

(3時30分頃に、そのUFOは私のテントの上から離れ、一瞬にして消えてしまった)

▶▶▶D

He finally **came back from across** the ocean to live with me.

(彼はやっと、私と一緒に暮らすために、海の方から戻ってきてくれた)

という言い方も同じ形をなしている。

日本語の観点からは、こうした形はいささか難しく思えるかもしれないが、ごくふつうの英語表現であり、頻繁に用いられ

るものなので、英文をよく読む学習者はそのうち慣れるはずである。また、英文を書くときに使ってみるのもいい練習になるだろう。

覚えたい重要例文

A. 「動詞＋副詞＋前置詞」

The refugees **crossed over into** Croatia.

(その難民は国境を越えてクロアチアに入った)

B. 「動詞＋副詞＋前置詞」

I've **fallen behind in** my house payments.

(私は住宅ローンの返済が遅れてしまっている)

C. 「動詞＋副詞＋副詞＋前置詞」

Gold coins were **brought up from below** the hull of the sunken ship.

(金貨が沈没船の船体の下から海面まで引き上げられた)

D. 「動詞＋副詞＋副詞＋前置詞」

At about 03:30, the UFO **moved away from above** my tent and disappeared in an instant.

(3時30分頃に、そのUFOは私のテントの上から離れ、一瞬にして消えてしまった)

なぜ、その英語では通じないのか？

マーク・ピーターセン・著

発 行：集英社インターナショナル（発売 集英社）

定 価：1,200 円（本体）＋税

発売日：2016 年 4 月 5 日

ISBN：978-4-7976-7320-3 C0082

ウェブでのご予約・ご注文は [こちらにどうぞ！](#)